

松平春嶽を

教え導いた

鈴木主税



鈴木主税肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

西郷隆盛が敬慕し、諸国の志士が、教えを請いに訪ねたことで知られる水戸の尊王攘夷の思想家、藤田東湖。彼から、「豪傑」として西郷と並び称された人物が鈴木主税です。

文化11(1814)年、主税は福井藩士、海福正敬の子として生まれ、後に鈴木長恒の養子となります。多感な青年期に福井藩の儒学者、清田丹藏に政治的実践を重視する崎門学を学びます。天保13(1842)年に寺社町奉行に就任した主税は、公平公正な行政手腕で城下の町民

から慕われ、その功により、弘化

2(1845)年、福井藩主、松平春嶽の側近に取り立てられます。

主税は、藩主である春嶽の成長が福井藩を立て直すことにつながると信じ、厳しく教育したといえます。「慶永公名臣建言録」には、こんなエピソードが残っています。

ある日春嶽は、家臣に対して「庭の手入れは当分必要ない」と命じましたが、間もなく「手入れをしろ」と命じました。それを聞いた主税は春嶽の発言の矛盾を指摘。領民の悩みや苦しみよりは、よほど庭木の方が大切であるようにお見受けいた

します」と述べ、藩主として、今、何を優先すべきか、厳しく戒めました。後に春嶽は、「眞雪草紙」の中で、主税のことを「私を補佐してくれた忘れることのない恩人」と述べています。春嶽が幕末の政治に重きをなし、明君と称されるに至ったのは、主税など家臣たちの教育の賜物だったのかもしれない。

嘉永6(1853)年6月、ペリーが浦賀に来航。開国か攘夷か、国論を二分する事態のなか、主税は江戸に赴きました。主税は春嶽に「大いに民風を振り起こし、国防を充実し、国家の威信を發揚せねばならぬ」と建言し、以後、春嶽の側近として將軍継嗣問題など国事の処理に携わっていきます。

この頃の諸藩の名士たちとの交流の中で、こんなエピソードが残っています。主税は、水戸藩の藤田東湖、熊本藩の長岡監物らと腹を割って諸外国への対応を論じ合いました。東湖は主税について「真に豪傑と称すべき者、天下にただ鈴木主税と西郷隆盛のみ」と、また、監物は「智徳兼ね備わるは主税に及ぶ者はなし」と称賛したといわれています。

安政3(1856)年2月、主税は43歳でこの世を去ります。その時、主税は側にいた橋本左内に対して

「私の志を遂げるのは君しかいない。天下のため活躍を願う」と後事を託します。春嶽や左内らに受け継がれた主税の志。その一つ一つは、幕末から明治の大改革の道標となったに違いありません。

関連史料・ゆかりの地

世直神社



(写真は福井市みのり1丁目)

鈴木主税は、木田荒町の町民にのみ課せられていた悪税「あおだ(※)」を撤廃したことから、町民から「世直大明神」として崇拝され、生前に生き神として祀られました。昭和に入ると、みのり3丁目にもう一つ世直神社が建立されました。

※「あおだ」…町で行き倒れた旅人を本籍地に送り返す費用等を地域が負担する税

【住所】

福井市みのり1丁目(福井鉄道商工会議所前駅より徒歩5分)
福井市みのり3丁目(福井鉄道商工会議所前駅より徒歩7分)